



波崎の友人をを訪ね、庭先に目をやると「千両」が赤い実をつけ、冬の日映えていた。正月の縁起物としても人気が高い。

正月以来、比較的穏やかな晴天に恵まれてきた。まるで晩秋から初冬にかけての晴天を意味する「小春日和」のようだ。日脚が冬至のころに比べて明らかに伸び、夕方5時を過ぎても明かりがある。しかし日が暮れて夜空を仰ぐと、冬の星座の代表格「オリオン座」が煌々（こうこう）と輝き、冬の真ただ中であることを知

2017.1.15

「気象コンパス」主宰

古川 武彦

大寒



る。

1月20日は二十四節気で「大寒」。5日の「小寒」から「節分」までの約1カ月は「寒の内」と呼ばれ、大寒はその真ん中に当たる。しかし実際は大寒から約半月が寒さのピークだ。

最低気温を平年で見れば、水戸では今日15日がマイナス2.1度、大子では同5.5度だが、極値はそれぞれ同2.5度（2月2日）、同6.0度（2月1日）とやはり大寒の後だ。その後は毎日約0.1度の割合で暖くなる。

最新の1カ月予報によれば、平均気温が平年に比べて「低い、並、高い」の確率(%)が「50、30、20」でかなり寒冬の見込み。こんな時期に低気圧が太平洋岸を東進すると、思わぬ雪に見舞われる。水戸では2014年2月4日に4㍉、8日には13㍉の大雪があった。

(元気象庁予報課長、理学博士、鹿嶋市在住)



干し芋作りに忙しい銚田市のおみ農園

銚田やひたちなか市などでは干し芋作りの真っ最中だ。トンネルのようなビニールハウスをのぞくと、蒸し上がって皮をむかれたばかりの黄金色のサツマイモが、ベルトコンベヤーのような台の上で行儀よく整列していた。茨城県の生産高は全国一で9割を占める。理由は一帯が栽培に適した火山灰と腐植で形成された地質に砂が混じった土壌と平坦さ、加えて乾燥に適した天候にある。

乾燥の度合いを示すのは「湿度」。空気中には目に見えない水蒸気が含まれているが、気温

2017.1.22

「気象コンパス」主宰

古川 武彦

干し芋



が高いほど多く含むことができる。冬はもともと気温が低いので水蒸気が少なく、湿度も低い。今年は例年のない強力な冬型の気圧配置が続き、日本海側は大雪に見舞われているが、太平洋岸の関東地方は「空っ風」で冬晴れ。

空っ風は山から吹き下る風を意味する。シベリア育ちの乾いた風が日本海を渡る途中、海から水蒸気をたっぷり吸収し、山にぶつかるとう上昇して雪を降らせるので水蒸気が減る。そんな空気が山を下る時、地表に近いほど気圧が高いため圧縮されて暖まり、湿度も低下し、晴れやすい。干し芋に好条件だ。「フェーン現象」はその典型だが、冬は気温が低いのでその効果をほとんど感じない。去る15日、最小湿度は水戸で16%、宇都宮で23%を記録した。乾燥は今後も続く、火の後始末にご注意を。

(元気象庁予報課長、理学博士、鹿嶋市在住)